

報告者：田中雅人

2021年11月7日、U・マクディスイー著『共存の時代』(*Age of Coexistence: The Ecumenical Frame and the Making of the Modern Arab World*, University of California Press, 2019) 読書会の第2回が行われた。当日はZoomを用いたオンライン形式の会となったが、開始時刻の14時から休憩を挟まずに17時半ごろまで活発に意見が交わされ、密度の高い議論が行われた。

第2回目は、早川英明氏(東京大学・院)が第1章「帝国の時代における宗教的な差異」(“Religious Difference in an Imperial Age”)を担当した。第1回同様、はじめに早川氏が作成した本章のまとめを基にマクディスイー氏の論旨を追い、都度、参加者が内容に関する確認や意見交換を行う形で議論が進められた。

本章は、題目の通り、19世紀以前のオスマン朝の支配体制において宗教的差異が果たした役割を扱ったものである。当日は主として、①前近代オスマン朝における「ミット(宗教共同体)」をめぐる議論、②18世紀以降の欧米のキリスト教宣教団の活動の影響、に関して質問や意見が交わされた。

まず①をめぐるのは、地方反乱鎮圧時に政権によって用いられた宗教的な「異端」抑圧の論理に着目し、オスマン王家を頂点とするムスリム優位の社会秩序を強調するマクディスイー氏の議論に対し、近年のミット制研究の潮流との関係で意見が交わされた。特にオスマン領各地に存在した宗教・宗派集団を横断的に分析する本章の議論の進め方とも関連し、地域社会のなかで各宗教・宗派集団が有したであろうローカルなコミュニティ意識や社会機能についての記述が乏しいことに批判的コメントが寄せられた。この点は、徴税請負や同職組合との関係から「ミット」を捉えなおそうとする近年の研究潮流とも関わる。恐らくマクディスイー氏の議論の主眼は、前近代のオスマン朝下の社会にしばしば安易に想定される「多宗教の共存」というテーゼに対し、それが近代社会における市民的平等を前提とする「共存」とは異なり、身分的不平等を前提とするものだったことを強調することにあつたと考えられる。これは、近年の一部のオスマン朝研究で見られる懐古趣味的な過去の称揚に対する氏の批判的立場とも一致する。

一方、②をめぐるのは、まず18世紀の欧米のキリスト教宣教団がオスマン朝下の社会にもたらした政治的影響を強調するマクディスイー氏の議論について、意見が交わされた。参加者の一人からは、エジプトやイラク北部での宣教団の活動実態との比較から、18世紀当初における宣教団の政治的影響力に懐疑的なコメントが寄せられた。同じ点について、別の参加者からは、マグリブでのカビール族の事例から、宣教団による社会集団の人種主義的把握がその後の植民地統治に繋がる場合もあるとして、同様の事象がオスマン朝下のアラブ地域で見られたかについて質問がなされた。この質問に対しては、1860年の争乱後のレバノン山地における宗派体制の構築に際し、マロン派やドルーズ派などを異なる「民族」として把握し、これらを分離しようとする論理が存在したこと、その背景には、地域の人口構成で多数派を占め、宣教団の言説を積極的に利用しながら、独自の「民族」たることを主張した当時のマロン派指導層の政治的思惑も存在したこと、等について報告者が情報共有を行った。最終的には、地域における宗派集団の人口構成も、宣教団の政治的影響力という点では重要であることを改めて確認することとなった。

同様に②の論点をめぐる問題としては、宣教団の活動を契機としたキリスト教内での宗派間の軋轢や衝突の増加に関し、マクディスイー氏が用いる「狭義の宗派主義(sectarianism in the narrow sense)」という用語法について質問が行われた。質問の意図としては、前著『宗派主義の文化』(*The Culture of Sectarianism: Community, History, and*

*Violence in Nineteenth-Century Ottoman Lebanon*, University of California Press, 2000) では、「宗派主義」を近代の政治文化に特有の現象と定義していた氏の主張とずれがないか、というものであった。この質問に対しては、前著『宗派主義の文化』が、近世期における宗派意識の先鋭化の問題に触れていないことについて受けた批判に応えたものではないか、という応答がなされた。即ち、18世紀に本格化する宣教団の活動をうけ、オスマン領内のキリスト教徒たちの中で自らの宗教・宗派への帰属意識の斉一化が進んだことは氏としても認めつつ、それがまだ、市民的平等という近代的な政治文化と結びついたものではない（マクディスイー氏の立場からは）限定的な「宗派主義」として捉えているがゆえに、あくまで「狭義の宗派主義」という用語を使った、という理解である。実際、報告者が本章を読んだ際、前著に対する上記の批判的書評を寄せた B. Heyberger 氏の著作や、前著刊行後に出版された、主に 18 世紀のアレッポにおけるキリスト教徒内での宗派間対立を扱った B. Masters 氏の著作などに著者が頻繁に言及しており、前著の議論をその後の批判や近年の研究に照らして補強・修正しようとする意図を随所に感じた。

以上、本章は、19 世紀後半から 20 世紀中葉までのマシュリクにおける「共存」の模索を主題とする本書の歴史的前提を整理する部分であった。これはレバノン社会を扱った前著『宗派主義の文化』における議論を、最新の研究成果を織り込みつつ、前近代オスマン朝の支配体制に敷衍する試みとして位置づけられる。但し、同時期のレバノンの社会経済史を研究する報告者にとっては、徴税を通じたオスマン朝中央との関係の変化や、国際商業においてオスマン朝内の宗教的差異が果たした役割など、扱われなかった部分も多いと感じられた。以上のような歴史的前提の整理が、本論部分における政治思想の分析にどのような濃淡をもたらすか、今後注視していきたい。